

# 光明寺だより

**第53号**

浄土真宗本願寺派

光明寺

〒793-0030 西条市大町550

TEL 0897-53-4583

## 新春特別講演

**1月10日(木)****午後7時**

元本願寺伝道部長

**【講師】 藤田徹文先生**

―雑草のうた―

相田みつを

わたしは道ばたの雑草です 名前はありません

図鑑を調べればわたしにも名前はあるんでしょうが  
一度も名前を呼ばれたことがありませんそしてだれからも相手にされることがありません  
雑草雑草とただ嫌われるだけです

だからわたしは自分の名前を知りません

いま歩道のはじのコンクリのわずかな割れ目が  
わたしの住み家

そこがいのちの授かった場所ですから

土も殆どありませんし肥料などは全くありません

その上 学校に通う子供達の運動靴によく踏まれます  
それでもぐちゃ泣きごとを言っている暇がありません冬が来るまでに一粒でも二粒でも具体的にタネを  
残してゆくために今一生懸命に花を咲かせているんですだれにも見てもらえない小さな小さな花ですが  
いのちいっぱい自分の花を――

踏まれても踏まれてもくじけることのない雑草の花を――



## 一口法話



## 最後だとわかっていたらなら

先日、あるテレビ番組で「最後だとわかっていたらなら」という詩が紹介されました。

作者はノーマ・コーネット・マレックというアメリカ人女性で、亡くなった我が子を偲んで書かれた詩です。

彼女は二児の母親でしたが、離婚によって、一人の子供を強引に夫に連れ去られてしまいます。（親権は彼女にありました）

警察の協力を得て懸命に子供の行方を捜すのですが、消息をつかめぬまま時間だけが流れていきました。

そうして二年の歳月が過ぎたある日、長男サムエル（10）の訃報が彼女の元に届きます。

それは、川で溺れている子供を助けようとして自分も犠牲になるという痛ましい事故でした。

彼女は深い悲しみを抱えたまま、残された二男を引き取り二人で暮らし始めるのですが、亡くなったサムエルのことは決して忘れることはありませんでした。母として我が子に伝えなかったけれども伝えられなかった思いや言葉。彼女はそれを一篇の詩に書き上げ、世に発表しました。

少し長い詩ですので、一部省略して紹介します。

― 最後だとわかっていたらなら ―

ノーマ・コーネット・マレック

訳・佐川睦

あなたが眠りにつくのを見るのが

最後だとわかっていたら

わたしは もっとちゃんとカバーをかけて  
神様にその魂を守ってくださるように祈っ  
ただろう

あなたがドアを出て行くのを見るのが

最後だとわかっていたら

わたしは あなたを抱きしめて キスをし  
て

そしてまたもう一度呼び寄せて抱きしめた  
だろう

あなたが喜びに満ちた声をあげるのを聞く  
のが

最後だとわかっていたら

わたしは その一部始終をビデオにとって  
毎日繰り返し見ただろう

あなたは言わなくても

分かってくれていたかもしれないけれど

最後だとわかっていたら

一言だけでもいい：「あなたを愛している」  
と

わたしは 伝えただろう

たしかにいつも明日はやってくる

でももしそれがわたしの勘違いで

今日で全てが終わるのだとしたら

わたしは 今日

どんなにあなたを愛しているか 伝えたい

そして わたしたちは 忘れないようにし  
たい

若い人にも 年老いた人にも

明日は誰にも約束されていないのだという

ことを

愛する人を抱きしめられるのは

今日が最後になるかもしれないことを

明日が来るのを待っているなら  
今日でいいはず  
もし明日が来ないとしたら  
あなたは今日を後悔するだろうから

## (中略)

「ごめんね」や「許してね」や  
「ありがとう」や「気にしないでね」を  
伝える時を待とう  
そうすれば もし明日が来ないとしても  
あなたは今日を後悔しないだろうから

今は亡き我が子を愛し続ける母親の  
切ない思いが読む者の胸を打ちます。  
この詩は一九八九年に発表されまし  
たが、その十五年後(二〇〇四年)、作  
者はガンのため亡くなります。六十四  
歳でした。

人は誰しも愛する人を失った時、ど  
うしようもない深い悲しみに襲われま  
す。そうしてその人への思いが強けれ  
ば強いほど「あれもしてあげればよ  
かった」「こうも出来たはずだ」という  
後悔の念に苦しめられます。

そうした時、残された者にとって最

も大事なことは、愛する人の死を無駄に  
しないためにはどうすればいいのか、そ  
れを尋ねていくことだと思  
います。

彼女は詩の中で、

「明日は誰にも約束さ



れていません。もしこれが最後だとした  
ら・・・そんな気持ちで、どうか愛する  
人にその愛を伝えてあげて下さい。今を  
後悔しないために」と、語っているよう  
に、彼女が見出した答えは「いま、この  
ひと時を悔いなく生きる」ということ  
でした。

これは、仏教で説く「一期一会」とい  
う人生観に大変近いものがあります。

一期一会とは「この出会いは生涯一度  
の出会いと心得て、今を、ここを、この  
ひと時を、懸命に尽くす」ということ  
です。

こうしてみますと、私たちが求める世  
界は、洋の東西を問わず相通じるもの  
があります。

そうして忘れてならないことは、彼女  
にこのような生き方を目覚めさせたの  
は、他でもない、先立つた我が子だとい

うことです。

さらに言えば、我が子の「いのちの願  
い」が、残された母親の心を目覚めさせ  
たのです。

その「いのちの願い」をはつきりと確  
信できた時、我が子の死は無駄ではな  
かったと、心の底からうなづくことが出  
来るようになるのです。

そのことを思えば、先立つ人は、まさ  
に、善知識ぜんちしき(人生の善き師)であります。

## BOOK 本

『最後だとわかっていたら』



発行 / 発売 サンクチュアリ出版  
定価 1000円 + 税



## 『前住職・門徒葬』特集



山門風景



受付風景



本願寺より「達書」伝達の様子

光明寺21世・釋寛興（前住職）が、さる十月三十一日、八十六歳を一期とし、往生の素懷を遂げました。  
十一月二日、近親者で密葬を執り行い、同じく十四日、光明寺門徒葬（葬儀委員長・森本隆雄）を、四州教区西条組の寺院住職のお勤めにより厳かに厳修されました。  
門徒葬には、四州教区教務所長・本川道法氏、宗会議員・成川和行氏を初め各寺院関係、門徒総代、各種関係者等々、大変多くの方々が参列されました。

ご会葬頂いた方を初め、ご香典、ご弔電をお送り頂いた方、お花をお供え頂いた方、さらには葬儀の準備、受付等々でお手伝いを頂いた方々に、改めて厚く御礼を申し上げます。有り難うございました。



お勤め風景

前住職は、約五十年間にわたって当山の住職を務めました。戦後間もない昭和二十九年、本堂移転（紺屋町より現在地へ）の大事業を行い、光明寺再興に多大な功績を残しました。法務の傍ら、教育委員、保護司、PTA会長といった社会的な活動にも積極的に携わり、地域社会にも大いに貢献しました。趣味も多種多様にわたり、釣りを始め、書やお茶を嗜み、酒を愛し、茶杓を作り、庭を造るなど、まことにバイタリティー溢れる住職でした。

法名・願庭院釋寛興

合掌

## 平成20年度行事予定表



日 時	行事名	講 師
1月10日(木)午後7時	新春記念講演	元本願寺伝道部長・藤田徹文師
1月16日(水)	正月参拝	
2月26日(火)	愛媛県仏教婦人大会	バンマー・ヤンジン
3月22日(土)午後2時	彼岸会法座	全国布教同志会会長・足利孝之師
3月29日(土)午前9時	涅槃会	
5月24日(土)午後2時	宗祖降誕会	本願寺住職養成課程講師・小林顕英師
8月13日・14日	新盆合同追悼法要	
8月16日(土)	お盆参拝	
9月27日(日)午後2時	彼岸会法座	本願寺中央相談員・季平博昭師
日時未定	報恩講	行信教校教授・天岸浄円師
12月31日(土)	除夜会・元旦会	

(注) 行事の追加・変更等は本紙にてお知らせします。

除夜の鐘をつきましょう！ 新年を光明寺で！

### 除夜会と元旦会

**12月31日 午後11時30分より**

除夜の鐘をつき終わり次第本堂にて行います  
甘酒・樽酒用意しています





## 趣味の広場



## 俳句を楽しむ (三十三)

森本隆を

今年の夏の暑さは格別でした。九月を厳しい残暑のうちに過ごし、十月に入ってやっと秋らしい爽やかな朝夕を迎えています。夏の疲れが出る頃とも言われますが、俳句の世界ではもう仲秋を過ぎて晩秋と言われるころになっています。実りの秋、食欲の秋、芸術の秋、いろいろななぞらえつつ、私達は四季の移り変わりの中で生きています。今回は、秋まった中で生きる日常生活の中で生まれる俳句、いいかえれば「日常句」について考えてみましょう。

秋深き隣は何をする人ぞ

芭蕉

山川草木から雲の動き、風の音、何を見ても深まる秋のなかで隣人はどんな人かも知らない。自分も含め季節の中でひっそり暮らしている庶民の生活実感を、率直に素朴に詠んだ句ですね。すでに芭蕉先生が、「わざわざ俳句を詠みに旅に出たり珍しい物を見に行ったりしなくていいのだよ」と教えてくれたのです。日頃の生活の中の自分の姿やそこに生まれる喜怒哀楽を素直に句に詠む、これはまさに俳句本来の楽しみですね。

一本の綱を頼りに松手入れ

ウオーキングの途次に見かけた何気ない一景です。立派な松の木の前で一心不乱の庭師さんの姿が印象的でした。

知らぬ間に手籠に余り栗拾ひ

高見秋峯

栗林に招かれそここの栗を拾っているといつの間にかずい分の量になってしまっていた、という句でしょうか。「知らぬ間に」という表現が実にたくみですね。つまり、栗を拾うのを目的としたというよりは、作者が秋の山の美しさや爽快さにひたっていたことを、それとなく感じさせ、かなり俳句歴の古い人だと思われるます。

生涯の今年後何時鯛雲

行方克己

現代俳壇の中央で活躍する俳人の作。秋空の定番とも言える鯛雲。それが目に入った時、四季の秋と己が人生の秋とが重なり合い、ふと頭の中をよぎった感慨をそのまま言葉にした句。でも、秋の季節感のおかげでそれほど深刻さを感じさせない、やはり達人らしく計算された句ですね。そうです、時折は人生についてとか自分の先き行きについて考えることはあるにしても、人間、前向きでないと生きて行けません、とも教えらるる句です。

“日常句”とか“日常吟”といつてもやはりそれなりの難しさはあります。例えば、自分には判っているが他人にはわからないというひとりよがりな作品が出来たり、いろいろあったことを整理せぬまま多くのことを一句に詠んだ

り、おおげさな表現で人目をひこうとしたり、といった事はさけないものです。身のまわりの事物やその状態を見きわめ、季節の変化を感じとり、それらを誰もが判る平明ないい方で、内容を一点に絞り、着実に句に詠む、これが日常吟の作法の基本ですね。

眼をつむりを置き去りの稲刈機

今瀬剛一

俳誌「対岸」主宰である作者の田園詠のけつ作の一つ。見たままの景で、誰が読んでも説明してもらつ必要のない、平明でしかしとても印象深い一句ですね。「眼をつむりを」という言い方がうらやましくくらいに素晴らしい表現です。同じ作者の作品で私の好きなものをもう一句、

一斉に声あげて穂の出揃へり

剛一

丹精込めて育てた稲が順調に出穂期を迎えた時期の光景がすぐ思い浮かびます。ともかく「一斉に声あげて」などという表現はなかなか思いつかないものですが、こういうふうには詠まれると、「なるほど」と感じ入るしかありません。一年を通して一枚の田んぼを注意深く観察するだけでもたくさんの発見があり多くの言葉を思いつくものですね。今回は普段の生活の中で出来た句について考えてみました。秋は短い季節です。大いに季節感を楽しんで下さい。



『寄贈誌』紹介コーナー

『父ちゃん  
母に捧げる  
東部ニューギニア慰霊の旅』



著者 井原満子  
A5版 52ページ

本書は太平洋戦争でお父様（横山梅吉様・光明寺檀家）を亡くされた萩生在住の井原満子さんが、お母様アキ子様（の三回忌を前に、初めて戦没地ニューギニアを訪ねた「慰霊記」です。

愛媛新聞の記事にもなりましたので、ご存知の方もおられるかもしれません。

慰霊地で追悼文を朗読し、思わず海に向かって「父ちゃん、一緒に帰ろう」と叫ぶシーンが感動的です。

訪問中に詠んだ川柳や写真なども沢山掲載されています。

井原さんは「私の戦後を終わらせる旅だったが、反戦への決意を新たにした」と仰っています。

『穀人詩畫』



著者 安永利明

以前から、少なからず中国に関心を抱いていた安永さんですが、中国旅行で知り合った丹東濤氏の影響もあり、長年、趣味で漢詩と絵を作ってこられました。七十歳を前に、丹氏の強い勧めもありそれらの漢詩や絵を一冊の本にまとめました。漢詩・154点 絵・53点 書・1点が収録されています。いずれ本紙で何点か紹介したいと思います。氏は上喜多川在住、光明寺の檀家さんです。

【自詠】

耕田流汗幾辛酸	耕田	流汗	幾辛酸
藤樹江村寄此身	藤樹	江村	此の身を寄す
芳歳風吹花又發	芳歳	風吹	花又發
躬躋華甲羨青春	躬は	華甲に	躋つて 青春を羨む

（上平聲十一真韻）

（大意）汗を流して田を耕して何年が過ぎたであろうか、藤の樹がある加茂川ぞいの村に自分はある。今年もまた春風が吹くと花が咲きます。しかし、自分の身は老いの還暦となり再び青春が戻ってくることはないだろう。

テレフォン法話  
0897-53-4585



「光明寺だより」を、ご家族の  
皆さんでお読み下さい。

## 平成20年度年忌早見表

年忌繰り出し表を該当者に配布していますが、手作業のため見落とすことがあります。必ず、ご自宅の過去帳で確認してください。

回忌	死亡の年号
1周忌	平成19年
3回忌	平成18年
7回忌	平成14年
13回忌	平成8年
17回忌	平成4年
25回忌	昭和59年
33回忌	昭和51年
50回忌	昭和34年
66回忌	昭和18年
100回忌	明治42年
150回忌	安政6年
200回忌	文化6年
250回忌	宝暦9年
300回忌	宝永6年



## 言葉のプレゼント

「明日こそは・・・」  
「来年こそは・・・」  
よりも  
「今こそ」が大事！



11月14日、前住職・入江寛興の門徒葬を本堂において執り行いました。多くの会葬者がありました。

(＊関連記事4ページ)

10月初め、関東地区で販売されている地域情報誌『東京カレンダー』の取材がありました。

9月16日、秋の彼岸会法座が勤まりました。多数の参拝者がありました。

11月23日、心光寺さん(土居町)の報恩講に、住職が二年ぶりに出講しました。毎年、百名余りの参拝者で、本堂は満杯になります。

檀家さんから本を寄贈いただきました。

(＊関連記事7ページ)

